能登半島地震について語る会
報 告 書

－輪島市内の被災地・2024.11 撮影－

日　時：2025 年 6 月 22 日 (日)
　　13 時 30 分～ 15 時 30 分
場　所：石川県七尾市青山町
　青山彩光苑　正面一階 多目的ホール

スマートフォン・パソコンで読めます

01 開催までの経緯

期 日:2025年6月22日(日)
場 所：青山彩光苑 多目的ホール

「能登半島地震について語る会」の様子

★「能登半島地震について語る会」開催までの道のり

2024年元日の午後4時10分に能登半島地震が発生しました。

【地震直後の情報共有】

地震発生の翌日、自立生活支援センター富山から、安否確認を兼ねた連絡がありました。直ぐさま能登の状況を伝え、その情報が「ゆめ風基金」へと送られました。このやりとりが、私と「ゆめ風基金」 との交流の始まりです。

【『ゆめ風通信』への寄稿】

2024年の暮れ、ゆめ風基金からの依頼で、能登半島地震の体験談を寄稿、その記事が掲載された『ゆめ風通信』は、2025年3月に発行されました。

【三重県の杉田さんとの出会い】

『ゆめ風通信』を読んだ三重県で車いす生活をされている杉田さんから「被災状況を視察し、当事者の方からお話を聞きたい」というメールが「ゆめ風基金」を経由して私に届きました。

【「語る会」の開催決定】

メールを通じて杉田さんと直接交流する中で、自身も東日本大震災の経験者として語り合う「能登半島地震について語る会」の開催が2025年6月22日(日)に決まりました。

02 語る会の参加者

「能登半島地震について語る会」の様子

★「能登半島地震について語る会」の参加者

・杉田　　宏さん　（NPO 法人なちゅらん）
・小林　学美さん　（DET 沖縄　沖縄国際大学他兼任非常勤講師）
・青野　周矢さん　（琉球大学 4 年）
・照屋　和美さん　（沖縄国際大学 4 年）
・天田　達也さん　（羽咋市「らっきい・楽生」利用者）
・九谷　博之さん　（NHK 金沢放送局 カメラマン）
・川崎　敏明さん（穴水町身体障害者福祉協会）
※能登半島地震で穴水町の自宅が倒壊し、穴水ライフサポートセンターでショートステイを利用中。
昭和 58 年 9 月の「七尾わたぼうしコンサート」で知り合いになり、「HSK 季刊わたぼうし」の編集委員にもなっていただき、インタビュー、取材に出かけていました。
・高城　正憲さん（青山彩光苑ライフサポートセンター利用者）
※自宅が経営する、和倉温泉の旅館「はまづる」が倒壊
・野岸　篤史さん（青山彩光苑ライフサポートセンター職員）
・桶屋　善一　（青山彩光苑ライフサポートセンター利用者）

03 主催者のあいさつ

司会者と主催者

★主催者のあいさつ

（司会:川崎 敏明さん）

自己紹介の前に、今回、ＮＨＫ金沢放送局の方で取材をしていただくことになりましたので、その経緯についてお話を少し先にさせていただきたいと思います。桶屋さんの文章の代読になります。

今日、ＮＨＫ金沢の九谷さんが取材に来られたきっかけは、２年前にＮＨＫ金沢夕方のローカルニュース番組「かがのと 610」で「心に残る秋から冬の風景」という手記の募集があって、応募をしました。そうすると、昨年の春に取材することになっていました。ところが、能登半島地震でお流れになってしまいました。

今回「能登半島地震について語る会の企画」を九谷さんに企画書を送り、取材に来ていただけないか、とメールを送ったことが始まりです。

私は旧志雄町出身です。九谷さんは羽咋市出身です。なぜか親しみを感じました。そのような経緯があってＮＨＫ金沢に取材に来ていただきました。お忙しいところ、わざわざ時間を作っていただき、ありがとうございました。

というのが、今回の取材の経緯です。よろしくお願いします。

★主催者のあいさつ

（司会:川崎 敏明さん）

「主催者のあいさつ」は「01開催までの経緯」と同じなので省略させて頂きます。

それでは、具体的に当日は、どういう状況にあったか。あるいはどういう思いをもったかというところを順に語っていただきたいと思います。自己紹介も兼ねてよろしくお願いします。

まず、元日の能登半島地震の青山彩光苑の様子、職員の野岸さん、よろしくお願いします。

（職員　野岸さん）

当日の勤務者の中には、私は含まれていませんでしたが、勤務者から聞いた状況を簡単ではありますがお伝えします。年末年始の休日体制ということで私の所属する棟の職員数は、16時の時点では３名、16時勤務終了の職員を含めても5名という少数で利用者約40名の安否確認や建物や居室内の危険個所の把握、利用者全員の屋外避難について対応しなくてはいけないということでした。

まず、最初の地震があってからも、落ち着く間もなく大きな地震が立て続けにおこる状況でしたので避難誘導のタイミングが難しいなか、とにかく全員を屋外に避難させるため必死で動き回っていたとのことです。ベッドごと移動した方もいますが、防寒対策のため衣類・毛布や布団も持ち出して掛けてあげていましたが時間が経つにつれ身体が冷えてきて我慢できなくなる方も多くいました。徐々に応援の職員が少ないながらも駆けつけてくれましたが、何度も続く揺れのなか不安な気持ちで過ごしておられました。余震が続く中、一旦大きな揺れが落ち着いたであろうということで、18時頃に、皆さん建物の中に入っていただきました。

ほとんどの部屋の中はいろいろなものが散乱していたことや、今後の避難の為、広い共有スペースに皆さん集まっていただいて、ベッドもホールに移動して過ごしていただきました。夕食については、通常の食事はとても提供できる状況ではなく

非常食を提供することになりました。こちらの方で１週間ぐらいは皆さん が軽食ができるように備蓄していますのでそれを食べてもらっていました。次第にライフラインの状況も明らかとなり、停電、断水という状態となりました。停電については、非常電源が作動して最低限の電源は確保できていましたが、やはりトイレの配管が破損して、最初の頃はタンクに残っていた水で流していました。それがなくなると流せないということもあり、非常用のトイレを使ったりとか、尿を固める粉を入れて処理をしたりしていました。簡単なところはそんなところでしょうか。当日の勤務職員に関しては、その日に勤務されていた方は、道路状況も悪く通行不可能な状態の箇所もあり、家に帰らず次の日も勤務した と聞いています。

04 参加者の自己紹介

主催者と杉田さん

（司会：川崎 敏明さん）

ありがとうございます。討議は皆さんの紹介が終わった後にしたいと思いますので、次に杉田さん、その日の状況を自己紹介含めてお願いします。

（杉田 宏さん：NPO 法人「なちゅらん」）

今回、小林さんから石川県の能登に行きたいので一緒に行かないと、小林さんとは15年ぐらいの友だちです。

実際、能登の震災を経験した障害当事者の人からいろんなお話を聞きたいねということで、先ほども少しお話が出ていた「ゆめ風基金」の方に相談しました。

そうすると、桶屋さんという人がいらっしゃるから、その人と是非アポイントをとって、一度ここにも訪れたら良いのではないか、とアドバイスをいただきました。障害平等研修（DET）とか、障害の社会モデルを、皆さんに理解してもらう活動をされている、小林さんのいつも活動しているメンバーの方と一緒に来させていただいたことがあります。

僕自身は三重県で活動していて、僕自身も生まれながらの障害をもっているのですが、自然災害をあまり経験したことがなくて、三重県は南海トラフ地震が来

るようなところなので、すごく災害については自分自身関心も強く、三重県の社会福祉士会の会員でもあるのですが、そこで災害のことも少し携わっている関係もあって、皆さんからの生の声を今日聞かせていただくことが楽しみというか、自分もこれから生かしていきたいと思って、今日は参加というか、一緒に来させていただきました。どうぞよろしくお願いします。当日は元日でして、僕は知的障害のある方と元日を一緒に過ごしてあげてと言われて、ホテルで過ごしていた時にちょうど地震が起きて、けっこう長く揺れた覚えがあります。

（桶屋　善一さん）

　えっ、三重県でも！

（川崎さん）

　けっこう揺れましたか？

（杉田さん）

　けっこう揺れましたね 。一緒に勤めていた職員の実家が、ちょうど、この石川だったもので、大丈夫とすぐ連絡を入れた覚えがあります。以上かな。結構、揺れました。今日はいろいろご準備いただいて、ありがとうございます。

（川崎さん）

　では次、小林さん、お願いします。

（小林 学美さん DET 沖縄　沖縄国際大学他兼任非常勤講師 杉田さんの友人）

　沖縄から参りました小林 学美と申します。ここに資料をつけていただいてありがとうございました。ＤＥＴ沖縄という共生社会づくりのための研修活動を行っています代表の小林です。その他に、昨年台湾地震があった時に、台湾地震で沖縄

杉田さんと小林さん

に津波警報が出たということで、沖縄も去年位から意識が高まり始めたので、行政やいろいろなところから依頼を受けて、避難検証ですとか、そういうことを昨年はやってきました。情報が届かないという課題がありますので、手話を使っての津波と地震のお知らせ、それから外国の方たちが沖縄に引っ越してきて増加率が高いのですね。なので７言語の言葉で津波と地震の避難を呼びかけるプログラムを去年は作ったりもしました。

今年は、地域の意識を高めていこうということで、この資料にもあるのですが、沖縄と沖縄の離島である宮古島というところで地域の方とつながりをつくるための研修から４回連続企画で、防災の課題を自分たちで発見して改善していくための社会や行政への提言というところまで、そういうプログラムを今年は展開しようと思っています。

私は琉球大学と沖縄国際大学で社会保障を教えているのですが、その教え子の４年生の２人を今日は一緒に連れてきました。２人も私の団体でボランティアをいろいろしてくれていますので、昨年、今年と福島の第一原発からの避難のあたりとか、岩手、宮城も続けていろいろ行っているのですが、今年は加えて、内灘社協の知人を介して能登半島のいろいろなところでお話を聞かせていただこうと思って来た次第ですので、どうぞよろしくお願いします。

高城さん・照屋さん・青野さん

（川崎さん）

学生さんの２人も自己紹介を

（青野 周矢さん　琉球大学４年）

はじめまして。琉球大学の４年生で社会福祉を勉強しています。沖縄の自立生活センターでアルバイトをしていて、生活支援とか重訪の介護で働いています。

今回は、自分は昨年位施設に実習に行ったところで、施設はどんなところか、どんなことを考えているのか聞けることができたら嬉しいなと思っています。よろしくお願いします。

（照屋 和美さん　沖縄国際大学４年）

はじめまして。私は沖縄国際大学の４年生で照屋 和美と申します。専攻はあちらの青野さんと同じで福祉を専攻しています。現在は私が住んでいる地域で、自治会というのか、みんなが集まれる場所として居場所づくり活動をしています。

今回こちらの石川県の研修で、防災であったり障害者の方が避難する際に必要なこと、大切なことについてしっかり学んでいきたいと考えています。本日はよろしくお願いします。

天田さん・高城さん

（川崎さん）

ありがとうございます。それでは高城さん

（高城 正憲さん）

青山彩光苑ライフサポートセンター利用者の高城　正憲です。僕の家は和倉温泉「はまづる」という旅館を経営しています。

当日１回目の地震の時は窓ガラスが割れて、２回目の地震で結構、被害を受けました。当日は５階に車いすのお客さんが泊まっていました。こんな地震の状態でしたからエレベーターも使えずに、従業員みんなで手助けして車いすの人を運んだりしたと聞いております。

また、元日の地震から、しばらく、和倉温泉に 22 ある旅館すべてキャンセルが続出でした。本当は８月頃にまた「はまづる」がオープンします。皆さん来てください。

（川崎さん）

今日、急遽、かほく市の方から参加していただきました、天田 達也さんです。自己紹介をお願いします。

（天田 達也さん　羽咋市「夢生民（むうみん）」の利用者）

天田と言います。よろしくお願いします。普段は、かほく市に自宅はあるのですが、羽咋市の「一般社団法人つながりの夢生民（むうみん）」のお店の方で働いています。

地震につきましては、母親と２人テレビを見ていた時に、ぐらっと１回大きな横揺れがありました。これは、ただ事ではないと思って、テレビのニュースにチャンネルを合わせて、１回避難しようと高台の方に結局行けなかったのですが 30 分位車で移動して自宅に戻った感じです。

この会議につきましては、うちの働いている職員に会議開催のチラシをもらいまして、良かったら参加してみれば、という話をいただいて、今日ここに来させてもらった次第です。よろしくお願いします。

（川崎さん）

お母さんも一言どうぞ

（天田 達也さんのお母さん）

よろしくお願いします。

04 元日の地震体験

（川崎さん）

ちょっと具体的に当日の状況がどうであったか。私の例でお話させていただきます。

当日、私は自宅で母親と２人、例年通り正月を迎えていました。４時10分何をしていたか、というとテレビの前にいました。自分の大好きなテレビ番組、日本テレビの「笑点」ですね。見ようと。綾瀬はるかさんが出演されるので是非見たいとテレビの前に陣取っていました。

４時10分、揺れる１分前にちょっと揺れたのですよ。「これはなんじゃ？」という感じでおったのですが、４時10分「とにかく普段の揺れとは違う」長い長い、縦揺れとも横揺れともつかない揺れが、自分としては、数分間は、続いたような感覚でした。

それで、どうしたかと言いますと、テレビが倒れないか？ ということで、テレビの台に体を寄せてテレビを支えたつもりでしたが、自分の体がふらつくので、逆にテレビの台にしがみつくような形で耐え忍びました。その喧騒(けんそう)が静まった頃に、ふと我に返り母親が自分に対して「早く外に出ろ」と、言葉で一生懸命外に出るように、鼓舞していたのですが、自分は体が硬直してしまって動けなくなっていて、どうしようと２～３分かけて玄関まで何とか転がりながら、母親も足が悪い中、一生懸命、母親は台所にいたのですね。

そこから出て来てくれて、母親も足腰、心臓が悪い、自分は自分の車いす、母親は自分が持っていたもう１台の車いすに座っていました。「さあ、これからどうしよう」と、外を見たら瓦が落ちているし、ガラスの割れた破片がいっぱいあって、とてもじゃないが、車いすでは行けないな、と思っていたところ、近所の過疎高齢地域ですが、比較的若い年齢の御夫妻が助けに来てくださいました。

そのお二方の力を借りて、自分と母親は車いすで近くの高台の神社まで逃げられたわけですが、自分の家の裏に小さな川がありますので、津波が押し寄せていて、家の多分自分たちが出る頃には来ていたと思うのですが、逃げる途中で後ろを見たら

（川崎さん）

家の方まで津波が来ていた状況でした。在郷の人たちが高台に集まってきて、これからどうしよう、電話も通じません、電気もつかない。天候は悪くなる。寒さは増す、さあ、どうすると、言った時に、それぞれが、その状況下にあってでも、一旦、家に帰り、たとえば毛布だとか、使い捨てカイロだとか、持ち寄って、自然にみんなで協力し合っていました。

何とかして、寒さをしのぐ体制を、誰ともなしに声かけせずに、自然とそういう形が仕上がり、何とか時間を過ごすことができたのです。が、ようやく、地区の区長さんなりが先頭になって「移動してください、地区の集会場に行きましょう」と。

地区の集会場に行くとなった時に、母親はなんとか歩けるので、なんとか中に入れるのですが、私は車いすなので畳の和室に車いすであがって、体を休めることはできませんので、とりあえず、その夜は、車いすで廊下に寄せて頂き、毛布を一枚頂いて、それをかぶって一晩過ごしました。

食事はその日の夜は、確か菓子パンだけだったかな。あとは、ジュースか、お茶か、その程度のものが、遅くに配布されました。翌朝、とりあえず何とか、しなくちゃならん。自分のトイレもしたいし。ずっと夜は、我慢をしていたので、家に行って何とかしようと思いました。夜明けを待って車いすでトボトボと自宅まで帰り、幸い車が無事だったので車に乗って集会場に戻りました。

だけども、集会場に入るのは当然できませんでしたので、車の中で、その日から一週間過ごすことになりました。食事の方は、集会場で配布されるものを、皆さんが代わる代わる車の方に持ってきてくださいました。

困ったことはトイレ、一応、いつもライフサポートの方のデイサービス、ショートは利用していましたので、その分の着替えと、その他の物は、車の座席スペースに積んでありました。それも一晩分だけですので、それをなんとか使って、３日目、４日目になったら支援物資で、たとえばリハビリパンツだとか靴下だとか、そういうものが入手できたので、それを使わせていただいて３日、４日頑張ってみたのですが、

（川崎さん）

５日目位になると、足が「パンパン」に浮腫んできました。血流が悪くなったのと、トイレを我慢するのに水分を取らなかった。逆に水分を取らなかった故に、体調がおかしくなったのだろうと思います。

たしか、５日目にDMATのドクターが、「このまま居てもあれだから、病院を探しましょう」という話をいただいて、探していただいたのですが、「緊急の方の方が先ですから」と順位もわかりませんでした。

まず、第一に道路が寸断されていましたので、「直接、そういう車両が来ていただけるお約束ができません」ということでした。皆さんに、ご指導いただきながら、なんとか耐え忍んで、自分が利用している「青山彩光苑 穴水ライフサポートセンター」に連絡を取りましたが、「現状ではお迎えすることができません」という返事をいただきました。

「じゃあ、お迎えいただけるようになりましたら、是非、連絡ください」ということで待っておりました。

その間も車の中で、ということになったのですが、DMATの方が地区の対策本部の方にいろいろとお話を持って行って下さって、車いすの方が車の中で生活するのは如何なものか、ということで、今度は地区の消防団の方が、集会場の一室にブルーシートを敷いて下さり、簡易のエキストラベッド、ポータブルトイレを設置していただきました。これでどうですか？　足を伸ばして寝られませんか？　というところまでして下さいました。地区住民の方々と協力していただいて。それで、初めて足を伸ばして寝ることができました。それであっても、やっぱり寝れないですよね。慣れない場所であるのと、安定感がないですから、身体を動かすにしてもつかまるところがなかったり、柵のないやつですからね。

サイドレールのないやつですから、体を動かすにも非常に緊張して、これは危ないからと、自分の一番安定する姿勢でずっと頑張ってみました。人間は不思議なもので頑張って耐えていると慣れが出て来て、この格好でもいけるのではないか、と

（川崎さん）

いう気持ちになりましたけど、結局また足の腫れが出てきましたし、これはどうにもならんなという感じでいたのですが、そうこうしているうちに、ライフサポートの方から「来てもいいです、よ。お迎えできますよ」という連絡を頂いたので、取るものも取りあえず、着の身着のまま、支援物資で頂いた、リハパンと体一つで穴水の方のライフサポートセンターに行きました。

行ったは良いが、施設の方も停電ですし、水道も水も出ないし、食糧も備蓄の食糧ということで、部屋に行くことができない。職員４名の方が車いすごとかついでもらって１階から２階へ連れて行ってくれました。

用意してくれた部屋で、足を伸ばして休むことができました。でも、ここと同じように電気も水もありませんから、職員もこちらと同様で、通常の勤務体制ではなく、非常時の何日間も、家に帰っていらっしゃらない、職員の方もいらっしゃいましたし、応援で急きょ来てくださったまま、そのまま居続ける職員の方もおられました。

そういうしているうちに、支援をいただける機会、というか主に東海地方からのボランティア、職員のボランティアの方々が、たくさん愛知県、静岡県、岐阜県、三重県あたりからの、これは協定がされているらしいのですが。

障害者支援施設の職員、主に生活支援員の方々がボランティアで応援に来て下さって、何とか、少しづつですが、通常の生活の形に戻るような雰囲気になったのは、そのボランティアの方が来て下さってからです。まだまだ、施設のガラスが割れたままだったりとか、トイレの配管がダメでうまく流れなかったりとか。食事がずっと非常食のままであったりとか、という状態は、ずっとずっと変わらなかったです。だいぶ長い間、変わらなかったと思います。

在宅であろうが、施設であろうが、地震になったら、みんなが当事者ですから、助けを求めるということは、なかなか自ら「助けて下さい」と言いにくいな、ということを今回、痛切に感じました。例えば、自宅からこういう状況になったので、誰か助けてというのも、個別避難計画等があって、台帳の上では、名前が載っていて誰かが

（川崎さん）

助ける、誰かが声をかける、というお約束事になっているのでしょう。

けれども、有事の際にはその方達も避難者になるのです。それでハンディキャップをもつ者として、お願いします、助けてください、となかなか言えない、という空気を今回すごく感じました。

皆さんにも今回、どう受け止めるかはご自由ですけど、それぞれに少し掘り下げて考えていただきたいという思いがあります。以上です。ここまでにしておきます。

（桶屋 善一さん）

はい、ありがとうございます。

（川崎さん）

次、善ちゃん

（桶屋さん）

僕はいいので

（川崎さん）

僕も言わんや駄目や。さっきの文章で本当に終わり？　楽な話

（桶屋さん）

だって僕は、初めは一部の揺れだったけど、だんだん大きな揺れになって怖くて動けなかった。

（川崎さん）

怖くて動けなかったというのが一番言いたかった。

（川崎さん）

怖くて動けなかった、ということが、一番言いたかった。

（桶屋さん）

電気も暖房も、普通通りにあったので良かった、と思いました。

（川崎さん）

ここに居たから良かった、ということをお話したいのですね。

（桶屋さん）

もし、電気や暖房が消えていたら、自分で何もできなかった。

（川崎さん）

本日、本来はこちらの職員で車いす利用者が参加する予定でしたが、都合により欠席です。言いたいことをここに書いてあるのですが、

S.Y氏（「青山彩光苑」総務課職員・車いす利用者）のアドバイス

「障がいを持つ者として」

・今回震災を経験してどう感じたか

・災害時に施設などの安全な場所にいなかったときはどう対処（覚悟）する？

・今後災害が起こったときの心構え

・支援が届かなかった場合の覚悟など

・それを叶えるにはどうすれば良いか？

・一緒にそれらを考えて後世に伝えていきませんか

どんなことでも、ご意見ありましたら。

（小林さん）

大きく捉えて災害が起こった時、障害のある我々はどうしたいいか。あるいは災害に備えてどんなことが必要かというようなことですか。

（川崎さん）

具体的にどうでしょう。自分たちは経験をしました。経験して、自分はさっき言ったように、要するに自分で動けない。行動を起こすことが、通常よりも難しい状況に陥った場合に「助けてください」と、どなたかにお願いをしなければならない。

声を出して「助けて」というのも１つ。それと、先ほど、ちらっとふれましたが、お役所の方の災害時の個別支援計画があって、災害時の時には地域の人、その他の人が助けてくれるような、一応、仕組み作りをしてあるはずなんです。障害者の個別支援計画を国が謳っているわけですから。だけど、よくよく考えてみると、助けに来てくださるはずの方たちも、結局、被害を受けているわけですから。

やっぱり、他人の事より自分の事の方がみんな人間大事ですよ。自分の身を守ることが大事になると思います。だから、走れる人は走って逃げます。我々は、そういう意味では、走って逃げることもできないし、助けを求めて助けが来るまでの時間を、自分で耐えうる力も、多分健常者より弱いと思います。

だから、常日頃から周りの人たちに、「もし、何かあった時はお願いします。」と、お願いはしてはいるものの、そういうことは、全く思いが通じないものなんだなと。言葉をいま選びましたけど、そういうことです。その後のこともそういうことが度々ありましたね。

（桶屋さん）

障害者、健全者は関係ないの？

（桶屋さん）

障害者、健全者は関係ないの？

（川崎さん）

いやいや。災害になったら障害者、健全者は全く関係ないよ。

（桶屋さん）

全くない。みんな逃げていく。

（川崎さん）

だって、自分の命が大事。本当に１分、１秒のことですから、他人の事など構っていられるか、という位の、危機感のある状況でしたから。そんな時に障害者がどうするか。常日頃から準備万端整えておきましょう。考えておきましょう、といくら言ってもということを今回経験させていただいたなと。

以前にも能登半島地震があったのですが、その時は、こんな恐怖感はありませんでした。2006年でしたね。

（桶屋さん）

あの時を僕は覚えている。

（川崎さん）

私は車の中にいました。何かご意見ありませんか。

（杉田さん）

聞いてもいいですか。石川県の場合は、個別の災害時の避難計画、というのは地域で暮らされている人には、だいたい作られていたんでしょうか。

（川崎さん）

努力義務です。

（杉田さん）

ですよね。だから、作られていない方も当然いました。川崎さんの場合は作られていたんですか。

（川崎さん）

私は拒否したのです。そういう案内が来た時、拒否する権利もありました。

（小林さん）

なぜ？

（川崎さん）

それは2006年の前の地震の時に、私と母親は、ちょうど、外出していて家に寝たきりの父親がいたわけですが、その時も、具体的な個別計画は当時はなかったです。近所の方、あるいは、民生委員さんが何かの際には言葉はあれですけど、優先的に駆けつける。自分も障害者だし父親も障害者だから、何かの時には駆けつけることに一応、お約束事としてなっていたわけですが。

私も母親もいない。父親もあまり外に出ないし、普段、他人とあまり接することの少ない人でしたので。さあ、いざとなった時に、本来駆けつけてくださるべき人たちが来なかった、というのが。

父親が「誰も来なかったよ。いや恐ろしかった」と。まあ、口約束というのは、そういう事なのかな、というぐらいの。自分はその時の感覚でそう思いましたが、一応その時も約束してあっても、来てくれないのかと、漠然と思いましたね。来てくれると言っていたけれど。時間がたってからでもいいし、ちょっと様子を見に来てくれれ

（川崎さん）

ば、良いのになと、その時は、思いましたけど、結局誰も来なかった。心細かったと聞いていたので、その後に努力義務となった個別支援の計画の策定で、同意しますか？　同意しませんか？　と言われた時に、仮に同意したところで、自分としてはまた、同じじゃないか、というのが脳裏にありましたので、お役所の定めたルールにしなければ、後々の支援に支障がありますか、とお伺いしたけれども、そこも何も考えてない。その後のことも考えてない。

ただ印として、「この家には障害者がいますよ」という把握するだけのものになってしまっているのではないか、と思い巡ったので、「それだったらいいや」という感じでね。止めた経緯があって、父親が亡くなってから、自分にも何年かに一度そういうお話が来ていますが、その時も登録していません。してあったら来た、と思いますか、という質問もいただきましたが「わかりません」と言いました。

今の自分たちの地域、石川県の中で能登北部の地域は高齢化率が６割以上になっていますので、過疎化が進んで働ける・動ける人数の少ない中で障害者がいて助けを求める。あるいは、それ以外のことで力を借りる、というのは非常に難しい状況にあると思います。

それに加えて、今、国の方では施設から地域にと、施設入所生活から地域で生活できるように移行しましょう、という動きが出てきていますが、こういう過疎化・高齢化の時代に地域で生活、もちろん自分の生まれ育った地域で生活する。あるいは自分の好きな住みたい地域で生活することは、良いことなんでしょう。

けれども、それをサポートいただける社会資源が何なのか、というところが何かすごくぼやけていて、そんな状況で災害時における個別支援、支援という言葉自体が誰かに支援していただくという人なのか。あるいは物なのか。あるいは何なのかが、不安になるような今回の地震だったと思いますね。

だから、ハンディがあろうがなかろうが、ノーマライゼーションとか、今言われている共生社会であるとかを、考えるベースになるべき部分の大切な１つの要素

（川崎さん）

だと自分は思いますね。他人との関わりであるとか、形であるとか。物であるとか。すべてにおいて、どういう風に関わりあえば、うまくいくんだろうか？　ということを今回すごく考えさせられました。

・・・休憩　　ＮＨＫ　ハートネットＴＶ上映（26分間）・・・

（川崎さん）

実際、施設でもこういう状況であるということも、皆さんにより知っていただける機会になったかと思います。

本題に戻って、障害者である我々が災害時にどうすべきか。どうあるべきかということに関して、皆さんからご意見をいただけたら、と思います。

まず、命を守ることかな、と個人的には思いますけど。こういう目に遭いましたから。だけど、皆さんそのためには、どういう、お知恵をお借りしたい、と思う気持ちもありますので、よろしくお願いします。

（天田さん）

自分もどうあるべきかはわからないですけど、ちょっと話戻りますけど、さっき話されていた個別避難計画ですけど、自分も親を通じて市に申請はしてあって、もしもの時は助けてくれる算段はしてあったのですが。

被害が少ないというか、かほく市の方は、まだちょっと震災被害が少なかったにもかかわらず、助けてくれるはずの近所の人が訪ねて来なかった、というのが現実に起こったことなのです。

自分自身も普段は、親の車で外出はするのですが、ご近所付き合いも、あまりしないので、自分は出かけるとなったら、まず自分で靴を脱ぐのはできるけど、履くのは難しくて、靴を履かせてもらって外用と家用の車いす２台持ちなんですけど、外用

（天田さん）

の車いすに乗り換えて外に出るという形なので、自分ひとりで準備して家の玄関にも出にくい状態なので、その辺をどうあるべきなのか。疑問というか、そんな感じです。

（川崎さん）

どうですか。今のお話の件についてもよろしいですし、ご意見ありませんか？

（小林さん）

質問してもいいですか。今のお話、とても関心のあるところで、個別の避難計画は出されてあるわけですね。

（天田さん）

出してはあるのですが、ご近所の方も被災しているわけなんで、お互い被災していたので、ご近所の人も助けに来なかった。余裕が多分なかっただろうな、と思うのですが。

（小林さん）

その計画の中に、一緒に逃げる人の名前を書く欄はありますか。

（天田さんのお母さん）

うる覚えですが、助けに来てくれるであろう方の名前と電話番号を書く書類があって、何があった時に、その方が来てくれるものだ、と思っていたのだけれど、そういうアクションもなく、そういえばなかったねと終わっちゃったんです。ご近所なので、特に聞きにいくこともせず、トラブルになると困るので、スルーしてきたのですけど。実際、元日は２人でいたので、私が連れ出すことができたのですが、

（天田さんのお母さん）

この人、一人になった時には、どうなるんだろう？ という思いが正直あります。

（小林さん）

個別の避難の計画と福祉避難所というものが、なかなか現実的に実行力のあるものとして、進まない、というのがすごく課題だと私たちも思って、今色々なところにインタビューしているところなんですが、沖縄の場合は計画を立てるにあたって、在宅で一人でいた場合、一緒に逃げられる人、援助してくれる人は誰ですか？ を本人が書く欄があるのですね。

なので、本人が家族の名前を書いたり、近所の方の名前を書いたり。もしくは、そういう人がいない場合は、空欄のまま出さなくてはいけない、という状況で、計画として６割位できたとか。全国的にね。

数が挙がってきていても、ここが空欄や、今みたいに元日なので。たまたまお母様と一緒におられたけれど、これが平日とかお仕事やお買い物に行っていた場合はどうするの？ というのが課題だと思うのですね。

ここに誰かの名前が書いてある、としても実行できる計画なのか、ということを、行政にしっかり意味のあるものにしないと、意味がないじゃないか？ と問いかけていく必要があると思っているところなんですよね。

（天田さんのお母さん）

後日、相談員の方に元日の助けがなかったんですよね、というお話をしたら、一人暮らしをされている方を最優先に動きました、というお話をいただいて、一人暮らしじゃないのですが、もし潰れてしまって、下敷きになった状態でも、誰も来ないのかなと思って。

（川崎さん）

僕も優先順位言われて、一番でなくても良いんだけど。どういう基準で何でどうなっているのか見えない。

（杉田さん）

避難計画はあまり作られていないですね。実際、僕は勝手に思うだけですけど、地震は台風と違って何も予告がたたずに、パッと来るじゃないですか。その時に、計画をパソコンの前で見れるわけじゃないから、思い出しながら、この人のところに行かないといけないとか。

そういうことがパッと思い浮かぶような、この人大丈夫かな？　と思ってもらえるような普段からの付き合いがあるのかなと。そういうことが大事なのかな？　と思ったり。でも、地域の人も被災者だし、命を守らない、といけない所も当然あるし、助けてくれるというのは、今も行政で作りますけど、確実に助けられることはありませんと、書いてあるわけですね。

だから、そういう中で「誰々さんが来てくれるはずだったのに、来なかったじゃないの」という思いだけが残ってしまうような計画だったら意味がないかなとか、施設の、僕もグループホームで働いているのですね。

実際、ここ「青山彩光苑」でも水がなくてトイレが困った、という話があるのですが、震災の時も当日 3 人体制で、それが 5 人になって応援が来てくれて、と思うのですが、自分は逆に家庭のこともあるし、職場のこともあるし、出勤できるのか。

道路も寸断されたら、仕事に行きたいけど行けない、というような状況もある中で、どうやって、ここの施設の人たちが、利用者の命を守りながら生活したのだろうかとか。

僕らも地震が起こったら、同じように車の中で生活するようになるのだろうなと思うと、トイレも我慢したりするだろうし、助けてと言えないという中で影響が出てくるだろうし、助けに来てくれる人はいろんな所から来てくれるだろうけれど、

（杉田さん）

障害のある当事者や家族が「こんなことに困っているんです。」ということをどうやって口に出していくか。「助けて。」と言わないと助けられない、というところもあると思うのです。

そこが、先ほども「ジレンマ」と言われたけれど、その辺りの部分で、我慢は僕も多分するのだろうけど、いつの時から我慢じゃなくて、対等にこういうことは必要だと思います。「お願いします。」と言えるようになってきたのか。いや、今でも言えないのかとか。その辺りを是非聞かせてもらえたらなという。

三重県の杉田さんからの写真です。

三重県桑名市の
なばなの里のイルミネーションです。

赤福餅です。中に赤福餅が入っています

（川崎さん）

難しいな。災害ということにフォーカスして考えると、やはり今、言われたように、自分なり家族がＳＯＳを発信して、誰がどのように受け止めてくれるのか。どのような立場の人でも、同じようにしてＳＯＳが届いた時に、何か次の行動を起こせるような仕組みがあれば良いなと。助けを求めているな。じゃあ、誰に言おう。どこそこに言おう、というものが何通りかあって、誰でもが伝えられる。言葉としてでも伝えられる仕組み。たとえば役場に言っても、役場も今回被災して、職員も数名で初動したということで十分に連絡もできませんでした。ごめんなさい、というのはありましたけど、そういうものでしょうね。多分。

自分は障害があるから「特別に早く助けてください。」とは自分は思いませんでし

（川崎さん）

たけど、先ほどから出ている優先順位から考えると、逆にそういう状況下で色分けしないと、進んでいかない部分も、行政がそういう意識を持って動いているとしたら、もう少し、見方を変えていただきたいな、という思いは震災後、自分はそういう気持ちになることがありましたけれど。

今のお話を伺っていると、その仕組みさえも、まだあやふやなものかなと。障害者個別支援計画というのは、一体、何なのか。改めて疑問というか、皆さんのお話を聞いて、改めて思いましたね。

（桶屋さん）

もし、これが夏に地震が起これば、エアコンもないし、冬よりもしんどい。

（川崎さん）

どっちもどっちだと思いますよ。何しろ、まず命を守ることからいくと、外的な刺激から逃れるための行動、例えば、瓦が落ちてくるとか、ガラスの破片であるだとか。まず、反射的にそれは思いました。

守ると。自分は車いすに座ってからですが、とにかく前に進んでいくことはできないから、障壁に対して自分が何とかしなくてはならない、と考えたけれど車いすは１ミリも動かなかったしね。というか、怖くて、動けなかったのが正直なところだけど。そういう時に、力をそれこそ貸して欲しい、と瞬間的に思うけど、それこそ誰も来なかった。

来るはずの人が来なかったと、そこで思って良いのかどうか。今の話を聞くとあれですけど。障害者が人に頼って良いとき、じゃないかな、と思うのですね。「助けてください」と大きな声をあげた時に、手を差し伸べて来ていただけるような環境づくりも、自分たちもしていかなくてはならないし、地域の方々にもそういう声を受け止めていただけるような、環境づくりはうまくできないものだろうか。

（川崎さん）

今のお話の流れでいくと、お役所が決めた個別避難計画というのが、机上の空論みたいになっていて、実質的にはほとんど役に立っていない状況なのです。

例えば、普段から避難訓練的なものを地域で、自分たちみたいな状況の者に対して、どういう風にしたら、良いんだろうか。自分たちは地域の人たちにお願いしたことに対して、どういう風に応えていただけるようにすれば、良いのだろうか、という具体的な訓練というか。

避難訓練みたいなものをうまく作って、仕組みを作って、常日頃からそういう訓練活動をやっていけば、それぞれの意識も変わっていくのかな、という気持ちはちょっとありますけどね。

あくまでも、お願いします。助けて下さい。というのが、ベースになるんだろうけど。自分じゃ何もできないから。

（桶屋さん）

自分はそうだったからね。

（川崎さん）

自分は在宅で経験したから、そういう思いがあるのでしょう。けれども、個別避難計画があっても、現状はお話があった通りなので、自分はもう家も、公費解体してなくなったので帰るところがないですから、施設に残るつもりでいますけれども。

在宅であろうが、施設に入所していようが、助けを求める時に、その声が届くのかなという不安は今も、今日時点でもありますけど。今日お話を聞いて余計に不安になったというか、その通りだな、という気がしたのですが、そういう思いです。

（川崎さん）

あと皆さんご意見あったら。

（小林さん）

全国的にこれは議題にあがっているのですね。本当に避難、日本中どこでも災害が起こりうるので、努力義務でも計画を立てる必要がある、と思うのです。この人が一緒に逃げられるサポートを誰がするか、という計画を立てて、本人がちゃんと自覚していない、といけませんし、双方が自覚していない、といけませんね。

私が思うのは、計画を立てたら、本当にそれで逃げられるのかを、繰り返し繰り返し行って、こういう状況の時は逃げられるけど、こんな状況の時は助けに行けなかった。そしたら、じゃあ、誰が助けに行くのだろう。地震の時は良かったけど、水害が来たら駄目だったとか。そういう時は、どうしたら良いんだろうと。計画を更新していくことが必要だと思うのです。

この話を「理想論でしょ」と言われることがあるのですが、台湾が昨年４月に地震があったのですが、被害にあった人が少なく復興も早かった。それはなぜかというと、これを繰り返し繰り返し、台湾はやっているんですって。月に１回は地区で避難の訓練をやっているんですって。だから、ものすごく日頃やっているから、いざという時もいい形で避難ができて、復興も早かった、ということなので、良いものは見習ってどんどん取り入れて、取り入れる中で、自分たちの地域にあった形に組み替えていくと言いますか、そういう対話を日頃からやっていくことが、必要じゃないかと強く思います。いかがでしょうか。

（川崎さん）

他にご意見ありませんか。高城さん大丈夫？

（高城さん）

この前の地震は、日中に起きとったけど、もしこれが夜中だったら。職員さんも忙しい時間、そんな時に起きたら、どうしようというか。混乱していました。災害は待ってくれません。

（川崎さん）

学生さん、最後に何かありませんか。

（沖縄国際大学　照屋さん）

私としましては、障害者の方々、以前に地域住民の方々が、障害についてとか、災害についての知識を持たないと、おそらく、避難する際に大変というのがあると思うので、話題からそれてしまうのですが、住民の方々に障害や災害について学びを取入れていくことを望んでいます。

（桶屋さん）

ありがとうございます。

（川崎さん）

杉田さん、最後に一言。

（杉田さん）

小林さんに最後に話をしてもらいたいなと思うのですが、はじめて災害が起こってから石川に来させてもらって、昨日も輪島の方だとか、今日も温泉の近くに行っ

（杉田さん）

た時にまだ屋根にブルーシートがかかっていたりだとか、解体を待っているような家もあったりだとか。そういうものを見ながら、どうしても質問したいというか。震災の記憶はだんだん時を経るにつれて、記憶が薄れていくと思うのですね。でも忘れてはいけないこともあると思うのですが、その辺で何を。

三重県は特に南海トラフ地震が来るかもしれない、と言われている所なので、そういう所でこれは大事だよ、というものがあれば、地域の助け合いを、もっときちんとしておかないといけないよとか、備蓄品を蓄えておいた方が良いよとか。地域住民に知ってもらうための取組をした方が良いとか。自治会にもっと関わった方が良いとか。そういった経験を踏まえた、お伝えしていただけそうなことがあれば、教えていただきたいと思うのですが。いかがですか。

（川崎さん）

今、自分たちの地域は、穴水町というところですが、何も解決してないのですが、復興も進んでいないのですが、一部では言葉だけで、この地震の記憶を風化させないための、語り部さんを募集したりだとか。募集というのはあれですけど。こうでした、「ああでした」という体験談を言うのはボツボツと出ていますけど、今後に生かそうとか。そういう状況にあわせて、こうした方が良いということの話し合いは、、小さくはそれぞれの単位でやっていますが、まだそんなにまとまって、大きな方向性が出ている状況ではないような、自分たちの町ではそう思います。避難のことにしろ、何にしろ。

（杉田さん）

課題がたくさんあって進んでいない。

（金沢市在住の知的障害者の父親の立場より）

私の娘は高校３年生の知的障害者です。元日の発災後すぐに仕事に行く必要があって、娘は妻に任せました。金沢でもすごく揺れて、娘と妻は家の１階の居間で大きな揺れにあい、家に被害はなかったものの娘は怖くて居間の中に一週間以上入れなかった。娘の希望で、妻が車で娘と街中をまわって気持ちを落ち着かせていた。金沢で街中にある森本・富樫断層帯が揺れた場合の被害も想定されているので、自分の家の対策をどうしたものかなと思っています。

答えはすぐには出せませんが、発災１日目、２日目を自分たちだけでどうしのぐのか、２週間、３週間、１カ月、そこまでどうやって乗り切るのかが課題なのかなと。川崎さんが避難所の畳の部屋に車いすでは入れなかったことに対して、ＤＭＡＴが来て工夫をして入れるようになった話は、これからの対策のヒントだと思いました。皆さんが経験したこれがあったからうまくいったということを集めることができれば、何が必要かなということが今後の対策して形として見えてくるのじゃないかと思いました。

どこの組織もそうですが県外から多くの支援してくれる団体が来ましたが、地元の自治体の職員やいろんな団体のスタッフ、職員が被災したので、今回の個別支援計画も地元の自治体が被災してパソコンのデータをすぐ出せなかったという話が出ましたが、大切な情報はパソコン以外でもバックアップすることも考え、それを県外から来た支援団体にすぐに渡せる工夫はしておいたらいいのかなと。皆さんが経験したことを記録し対策を考えておくこと。県外からの支援団体に引き継ぐ方法も考えていくことなんだろうなと思います。

（川崎さん）

貴重なご意見、ありがとうございました。よろしいでしょうか。何かご意見ございますか。ございませんか。これは言い足りんぞ、ということがあれば、言っていただければ。大丈夫でしょうか。小林先生何かございますか。最後に一言。

（小林さん）

本当に災害が多発していて、避難訓練というと学校で火事だとか地震だからと。こう合図が鳴ったらこうしてねという、これって本当に意味のない訓練。こうして多発してくる中で、いろんな方が実感されていると思うのですね。

さっきもおっしゃったように、この避難訓練も昼間だけでなくて、夜だとかね。雨の日、天気の悪い日だとか。寒い日、暑い日とか。そんな日にもみんなが安全に逃げられるような。あきらめずに、粘り強く地域で一緒に継続していけるようなことをやっていかないと、行政の方からは動かないと思いますので。

そういう声は気づいた人があげて、つながりあっていく。つながりあっていくと、行政も気づいてくれる。それでも行政主体では動いてくれませんが。行政の意識も変わっていくと思うので。そこが今の頑張りどころだと思いますので、たくさんの意見交換をしながら、みんなで命を守りあえるような社会をつくっていけたら良いなと思います。

今日は貴重なお時間をどうもありがとうございました。

（川崎さん）

最後にせっかくですので、記念撮影をさせていただきたいと思います。よろしくお願いします。

記　念　撮　影

「能登半島地震について語る会」の参加者

杉田さん、沖縄の大学生・講師と記念撮影

令和６年元日の地震発生の翌日、自立生活支援センター富山より、地震状況に原稿依頼がありました。

ゆめ風基金の「ゆめ風通信」に掲載されたことにより、三重県の杉田さんから会いたいと要望が届き、懇談会を企画。

地震災害体験者、自宅の旅館が倒壊被害者に参加依頼し、青山彩光苑に協力を頂きました。

当日は、飛び入り参加があり、熱のこもった懇談会となりました。皆さんのご協力ありがとうございました。

（桶屋）

特別寄稿・私の能登半島地震体験

障害者支援施設
青山彩光苑穴水ライフサポートセンター
職員・雲田 喜弘さん

地震当日、私は家族と家にいたのですが、最初の地震は揺れがなく、携帯の速報で知りました。

その後すぐに大きな揺れがあり、家の冷蔵庫や食器棚の中身が落ちていく様子をなぜか冷静に見ていました。揺れが落ち着いてすぐに家族に避難するように話をし、車で避難先の小学校に行きました。そこでは温泉の観光客も避難してきてグランドに千人ぐらいの避難者が集まっていました。みんなで携帯のYoutubeで速報を見ながらこの地震の情報を集めている感じでした。私の娘は音に過敏に反応するので、鳴り響く警報音に泣きながらもグランドで待機していたのを覚えています。しばらくして揺れも少なくなってきたこともあり、体育館に旅館宿泊者や高齢な地域避難者が、各教室に小さい家族がいる避難者の方が分かれて避難しており、車で避難所に来た方は車で避難して下さい、とアナウンスがあり、車で待機していました。

夜になると避難所に本部の設営がされ、運営陣に知り合いがいたので手伝えることはないかと聞くと、各旅館から毛布や布団を持って来た従業員さん達が配るのを手伝える人はお願いしますというので、教室や体育館に運ぶ手伝いをしたり、旅館の方が持って来たお菓子などを配ったりしました。また、すぐにトイレ問題が発生しました。避難所の想定利用者数の三倍の避難者が集まったこともあり、すぐに貯水分がなくなり、水が流れないのでグランドの端の方に穴を掘って仕切りをし、簡易トイレをしたりしていました。子供たちは、あまりトイレに行かないようにしていました。

避難したのが夕方だったこともあり、子供たちも「お腹が空いた」と言うので、自宅へ食べ物などを取りに行きました。地震で物が床に散乱しているなか、さっと食べられるものと飲み物だけを取りに行ったことを覚えています。その後は、車で過ごしながら、携帯の電波状態の悪さで繋がらなかった。珠洲に住んでいる義母と連絡が着き、建物の何かに挟まっているので避難できないいうことがわかり、義母の携帯の充電が夜中に切れたこともあり、その後の状況が分からず不安になることもありましたが、朝になり救助され、避難所にいることが分かりホッとしました。

約 2 年に及ぶ青山彩光苑の大規模修復工事は新たな舗装路面に白線を引いて完了となりました。工事関係者の皆さまにも心より感謝申し上げます。

〒926-0831 石川県七尾市青山町ろ部22番
社会福祉法人 徳充会
障害者支援施設「青山彩光苑」
利用者：桶屋 善一（おけや ぜんいち）
☎0767-57-3309
ＨＰ :http://jiritsusien.com
Mail :okeyaz316@outlook.com

2026 年01 月 01 日発行